玉子王子　著

一章　生意気男子を呼び出してキ〇タマ潰しで黙らせよう！

　すべて自分のせいと隼人は思っていた。

　往郷小学校の廊下を一人歩く。

　大竹隼人、一〇歳、四年生。

　華奢だが、軽い足取りから運動能力が高いことがうかがえる。

「お、隼人じゃん！」

　四人ほどのクラスの男子が前から歩いてくる。二ッと笑い、駆け寄る隼人。

　駆け寄って、両手を頭の後ろに、腰を突き出して叫ぶ。

「エビぞり！」

　今流行っている芸人のネタ。知らない人間にとっては面白くない以前に意味不明だ。

「ぎゃははは！」

　だが、男子らは手を叩いて笑う。周りの関係ない者たちも大受けだ。

　その反応ににんまり笑う隼人。

　――これこれ、みんなを喜ばせ、楽しませてこその俺だ。それが、ここ最近はうまくいってない。

　一緒に遊ぼうという男子らに、用事があるといって別れる。

　昼休み。

　ため息をつきながら歩く。

　ここ最近、隼人のクラスでは男女の争いが起きていた。きっかけが何だったか、隼人はよく覚えていない。

　一様、クラスの主導的な男子の一人である隼人が覚えていない、というよりそもそも知らなかかったのだから、元からまともな理由などなかったのだろう。

　それでも、なんとなく別れ男女に、睨み合うような形になっていた。

　いや、それだけならまだしも、最近では実際の争いも起こっていた。男子がクラスで走りまわって遊ぶのが邪魔だといってきた女子がいた。それを、その場にいた男子が文句を言い返し、髪を引っ張って泣かせたのだ。そうなれば他の女子も駆けつけて来るし、相手の数が増えれば隼人も男子の一人として応援に行かざるを得ない。

　結局は、声の大きな女子を突き飛ばして黙らせてしまった。

　――あれから、さらに男子と女子の仲が険悪になっちまった。俺のせいだ。笑いをとって、丸く収めるべきだったのに。

　そんなことができるほど笑いのセンスはないし、そもそも笑いをとれる状況ではなかった。

　それが理解できないから、センスがないといえるのかもしれない。

　とにかく、たかだかクラスの人気者程度が勝手に背負い込み、悩んでいる。

　悩みつつ、歩く。

　クラスの女子の一人に図書館に呼び出されていた。

　告白したい子がいるから、話を聞いてやってほしいという事だ。

――こんな時にそんな話が来るなんて……やっぱ、うれしいわな。それに、男女の争いを止めるきっかけになるかもだし。

考えつつ、図書室に入る。

図書室の入り口横には、貸出作業用のカウンターがある。

そこを通り過ぎ、椅子に座って背中を向けている一人の女子に近づいていく。

「なあ、来たけど……」

「そう。それじゃ、今だよ！」

振り返る女子。一〇歳なら大体小さいが、特に小柄に見える。

「あ、転校生の」

「そう、鈴木高見」

「今だよって何……え？」

後ろで物音。

カウンターから、女子数人が飛び出し、扉に駆け寄って鍵をカチャリと掛ける。

「え、ちょっと……あ」

奥の図書準備室の戸が開くと、ぞろぞろと女子が入ってくる。

クラスメイトは男女二〇人ずつ。

入ってきた女子は一〇数人、扉を閉めに行ったものと合わせて全員集まっているのではないか。

「え、これは……」

「みんなから聞いたんだけど、隼人ってクラスの男子のリーダー格の一人だよね」

「そ、そうだけど……」

「クラスで今、女子と男子喧嘩してるじゃん。何とかするために、いいこと思いついたのよ私」

「な、何する気だ……」

「リーダー格をこうやって呼び出して、みんなでお仕置きして喧嘩する気をなくさせりゃいいと思ったのよ」

「な、ふ、ふざけんな！　何する気だ……みんなで殴ろうってのか！？」

青ざめ、また、顔を怒りで赤らめる隼人。

慌てて手を振る高見。

「いやいや、誤解しないで。そんなひどい、怖いことできるわけないじゃない」

「そうそう」

「可哀そうだしね」

うんうん頷きながら、女児が周りを囲む。不安を覚えつつ、少し安堵する隼人。

――殴り掛かってくるわけじゃないらしくて、とりあえずホッとしたが……何する気なんだ。

と、前に立つ高見が見上げてくる。

「それじゃ、これから何するか言うね？」

「なんだよ」

「女子と男子が争うっていうか、あんたたち男子が女子にちょっかい出してくるのは、女子と男子とどっちが強いかわかってないからだと思うの」

「いやわかってるよ、男子のほうが強いに決まってんだろ」

「まあ、確かに体のほとんどの部分は男子のほうが強いよねえ」

　実際の所は子供だと女子のほうが発育が早く、体が大きかったりする。

　だが大人になると男のほうが大きくなるので、子供の頃も当然同じようなものだろうと多くの人間が誤解していた。この場の隼人や高見たちもみなそうである。

「確かに男子のほうが強いよ、体の……一部分以外は……ね」

「え」

　ドキリとする隼人。

　体の一部分。

　男の、強くない一部分。

　――え、ちょと待て、それって。

　思わず膝を締める。隼人の股にぶら下がるモノがキュッ引き締まる。隼人のそこは大ぶりで、クラス一大きいのを自慢にしている。水泳の着替えの時など、女子の前で振り回して見せて反応を楽しむのが好きという割と危ない面を持っている。

　そんな隼人に、ニヤニヤしながら周りの女子が顔を近づけてくる。

「一部分、一部分」

「隼人、どこの事かわかる？」

「わかってるよね、膝、締めてるもんね」

「内股だー、あはは、守ろうとしてるよ！」

「う、うるせえブス！」

「おっとっとー」

「さっすが男の子様は態度がデカいわー」

「これはやっぱり分からせてあげないとね」

「っていうか、隼人覚えてる？　この前私、あんたに突き飛ばされたんだけど」

「女の子突き飛ばす様な狂暴な男の子には、やっぱお仕置きしかないね」

「な、何する気だよ」

「あはは、だからさあ。これからここにいる女子皆で……」

　ペン、と自分のスカートの前を何の恐れもなく掌で叩く高見。

「蹴りまくるってことよ。男の大事なタマタマを！」

「な、ちょ」

　思わず股間を庇う隼人。

「きゃはははは！　何そのかっこ！」

「男の子の構え！」

「ああ、女の子はあんな構え絶対しないもんねー」

「キンキン守ってる、守ってるー」

　女児たち。せせら笑い、あえて股を開いて股間を無防備にし、そこを守ろうとしている隼人相手に女であることの有利さを見せ付ける。

　もちろん多少は気の弱い者もいれば、隼人と親しい者もいる。

そういう者は顔を赤らめてさほど股も開かず腰も突き出さない。

済まなそうな顔で目をそらしたりする。

が、大体はノリノリだ。

「みんな、タマタマ攻撃する前に、確認だよ！」

手を上げる小柄女児高見。

「まず、もしタマタマが潰れてもこの薬、ナノメカ入りのいい薬だけど、これを飲ませればタマタマは簡単に再生するから潰しちゃっても大丈夫。だから遠慮はいらないってこと」

「知ってる知ってる！」

「うちのお姉ちゃんも、これがあるから彼氏が浮気するたびにタマタマ潰せて助かってるってさ！」

「そうそう。それで第二に、私たちはタマタマ付いてないから同じ仕返しの可能性はゼロ。だから遠慮は無用！」

「そうそう！」

「女は全員金的無効！」

「女は全員お股が強い！」

「男は全員金的有効！」

「男は全員お股が弱い！」

飛び跳ねる女児たち。隼人は気づく。

徐々に、はじめは遠慮がちだった気弱な女児も、そこそこ親しい女児も、楽しそうに声を出し始めていることに。

――や、ヤバい……女子どもの一体感が……

「それから、あくまでも狙うのはタマタマだけ！　顔とかお腹は無し！　ひどいことはだめだよ！」

「わかってる分ってる！」

「っていうか、顔とかじゃ、痛そうでねえ」

「そうそう。私らにも分るもん。その点、タマタマとなると……想像不能！」

「だから、遠慮なくいけるというね！」

「ま、待てよ！　お前ら、遠慮しろ。玉のほうが痛い！　痛いんだよ！」

「きゃはは、わかりませーん！　だってねえ？　私たち女の子は……」

周りの女児らと顔を見合わせる高見。スカートのものたちが前に並ぶ。

「せーの！」

そして、一斉にそれをめくり上げる。

「お股にタマタマ付いてないから！」

並ぶ女児パンツ。ぴっちりした布ではっきり形がわかる平らな女児の股間。

「うう」

顔を赤らめて気圧される隼人。

女児らも、パンツを見せた者も見せていない者も顔を赤らめ、興奮状態だ。

「きゃはは、それじゃそろそろ始めようか。最後に、景気づけにみんな、声を合わせて！」

高見。

女児らを見回し、口を開く。

「これからみんなで狙うのは！」

「これからみんなで狙うのは！」

「あんたの大事な金の玉！」

「あんたの大事な金の玉！」

「キ〇タマキ〇タマ、キ〇タマ狙う！」

バシバシ、と自分の股間を叩く高見。

続いて当然という顔の高見だが、女子らは顔を見合わせる。動きはともかく、発言がきつい。

「えー」

「やだ、そんなもろに……」

　数人は続くが、多くの女児がそんなモロな発言は躊躇する。

　高見が手を叩く。

「ほらほら、実際にキ〇タマ潰しするんだから！　口に出すぐらい遠慮しないで！　女子だけの時は言ってんでしょ？」

「そりゃねえ」

「これから隼人は私らにキ〇タマ潰されて女の子になるんだから、遠慮はいらないよ！」

「ふざけんな！」

「ふざけてませーん、ガチでおキンキンを潰しまくりまーす」

　いって、女子たちを見回して手を挙げる高見。

「それじゃ。それじゃ、いくよ？　せーの……キ〇タマ潰す！　キ〇タマ潰す！　お股を狙うぜ女の子！　急所を蹴って玉潰し！　キ〇タマ狙って金潰し！　キ〇タマキ〇タマ、キー〇タマ！」

「キ〇タマ潰す！　キ〇タマ潰す！　お股を狙うぜ女の子！　急所を蹴って玉潰し！　キ〇タマ狙って金潰し！　キ〇タマキ〇タマ、キー〇タマ！」

　女児ら全員が、バシバシ股間を叩きながら絶叫する。防音の優れた図書室なので、外に聞こえて誰かがやってくることもない。

　目を見開き、ほとんどトランス状態で急所攻撃を宣言する女たちに青ざめる隼人。

「ひ、ひい……そんな」

「それじゃ！　みんな、キ〇タマばっかり狙って行こうね！」

「おおっ！」

「うわ、やめ……」

　隼人に群がる女児たち。

　手でそれを突き放し、少しでも離れようとする隼人。

　対する女児たちは、次々と小さな爪先を振り上げて隼人の股間だけを集中的に狙う。

「うわああ！　やめっ、やめっ！」

　わめき、走り回る隼人。だが、すでに囲まれている。服の背中や裾を捕まれ、輪から出ることもできない。

　取り囲み、唾を飛ばす女児たち。

「蹴って蹴って！　タマタマ蹴って！」

「後ろからでもお尻の間狙っていけるよ！」

「近づいたら膝押し込む形で！」

「ちょ、あぐっ！」

　ぐにょ、と女児の小ぶりな膝が隼人の大ぶりな股間を直撃する。

「ちょ、おおおおお」

　腰を引き、目を剥く隼人。

「おお！」

「やった、追撃だ追撃！」

「まって、ここは一発目の反応楽しもうよ！」

同じ女児でも、金的に慣れている者とそうでない者がいる。

慣れていない者は更なる金的を求めたが、慣れている者は一発当ててしまえばあとはどうとでもなると肌で理解していた。

女児が見守る中、股間を押さえる隼人。

「く、くふうううう」

吹き出る汗。急所痛を押えるのに脳内麻薬が出て、脳の力が使われて貧血になり眩暈がし始める。

その姿を観察する女子たち。

「どうなの？　あの状態は」

「まだまだでしょ？　動き回ってたからそんなに強く入ってなかったし」

「いやいや、それでも十分なんだよ。キ〇タマって本当に弱いから」

「えー？」

「それより、見ててよ、反応。タマタマ蹴られた男の子って、二つの反応するの」

「そうそう、ジャンプとダンスね」

「踊るの？」

「お尻振って踊るのよ。キ〇タマダンスって呼ばれてね。それか、体を上下に揺すったり、ジャンプする人もいるの。キ〇タマジャンプね」

「そのまんまじゃーん」

「隼人はどっちかなあ」

「あ、ダンスだよ」

手を挙げるのは、隼人と親しい女児。親しいというか家が隣の幼なじみだ。

「何で知ってるのよ」

「昔うちのお風呂に一緒に入った時に、あいつ遊んでてシャワーのヘッド落して、タマタマに当てちゃったの。そこでタマタマ押さえてお尻振り出して、何踊ってるのってお母さんが噴き出して言うもんだから、私もお姉ちゃんも大笑いで……それからも今までもう、私やお姉ちゃんに何度も何度も何度もタマタマやられて、そのたびに大体お尻振るのを見て来たから、明らかに隼人はダンス側で……」

「つ、艶子お前そんな……く、くううう」

――何がキ〇タマダンスだ。馬鹿にしやがって。自分が同じこと絶対しないから、安心して見下せるんだ。クソマ〇コども。あ、こいつら期待に満ちた目を……そんなもん応えねえぞ。俺は笑わせることはあっても、笑われることはねえんだよ！　誰がケツなんか振るかよ！

眉を吊り上げつつ、突き出した尻を無意識にクイクイと振る隼人。

手を叩いて噴き出す女児たち。

「ぎゃはははは！」

「踊ってる踊ってる！」

「マジでダンス派なんだー」

「玉が痛いから踊るってどういうことなのよねえ！」

「わかんなーい、だってついてないし！」

「っていうか、付いてなくてよかったぜー」

「うらやましい？　隼人、これうらやましい？　今の痛み、私たちにはないのよ？　うらやましい？」

腰を引いて下がっている隼人の顔の前で、ピラピラとスカートを捲って見せる艶子。

「そりゃ羨ましいでしょうねえ」

「今日みんなで玉無しにしてあげれば、この先は私ら同様無敵なんじゃね？」

「だってさ！」

ニマっと笑い、顔を近づけて小声で話しかける艶子。

「玉無しになれてよかったねえ隼人、今晩のお風呂、私だけじゃなくて久しぶりにお姉ちゃんもよんでさ、三人で入ろうよ。ここに弱々ボールがない女の子三人でね！」

幼馴染とはいえ、十歳の男女が毎日のように一緒に風呂に入っているというのも無茶な関係だが、それが普通の隼人たちにとっては別にどうという事もない話だった。しかし人には隠す程度の分別はあった。

それはともかく、隼人はそれを聞いて目を輝かせる。

「え、涼香姉ちゃんと？」

　艶子の姉涼香とも幼馴染だが、中学になってさすがに彼女は一緒に風呂に入ることはなくなった。いや、かなりまれになっただけでたまにはあるが、ともかくレアなイベントになっている。

　涼香はツルペタの同じ年の幼なじみと違い、しっかり大人の女の体になり始めている年上幼馴染だ。

　そんな相手と久しぶりのレアイベント発生と聞いて、健康な男児が目を輝かせるのは当然だ。

　その表情を見て、笑顔を引きつらせる艶子。

「……」

　――何こいつ、お姉ちゃんと入りたいの？　なんかイラっと来るわ……

　憎からず思っている幼なじみが、姉の方に気があるかのようなことをポロリと口にすれば多少腹も立つ。気があるというか、中学女子と風呂に入れるなら入りたいと思うのは男なら普通の話でしかないという事だが、まだそこまで男に対して達観していない女児である。

　と、艶子の肩を高見が叩く。

「よくわからないけど、そのムカつき……」

「別にムカついてないって」

「何でもいいけど、タマタマにぶつけてあげようよ、キ〇タマにぶつけてあげようよ」

「そうね、それじゃ」

　と、話している間にも他の女児が隼人の顔を覗き込む。

「きゃはは、ほんと苦しそう」

「汗ダラダラじゃん」

「そんな風にならない、女の子の無敵のお股、羨ましいでしょ？」

「わ、わけわかんねーよクソマ〇コが……」

「え？」

「部品不足の出来損ないの股間が羨ましいわけねーだろ！」

「おー」

「へー」

　満面の笑みだった女子たちが、急に半眼になる。

「出ちゃいましたねえ、おチン〇ン主義発言」

「これだから男の子様は」

「おチン〇ン帝国皇帝の御言葉はちがいますなー」

　頬を引きつらせつつ、高見が体格のいい女児ら――というか多少背が高いだけで大人から見れば華奢な女児でしかないが――に耳打ちする。

　別に耳打ちするほどのこともなく、さっと女児らが隼人にとりつき、腕を引っ張って背中を押す。

「あ、ま、今のなし！　はぐっ！」

　ベシ、と無防備な股間に高見が小さな手で作ったカップが叩きつけられる。

「あおおおおお」

　目を剥き、グネグネと腰を捻じる隼人に半眼を向ける高見。

「はいはい。おチン〇ン主義発言のキャンセルは受け付けておりまーせん。どうしてもというなら、キャンセル料としておキ〇タマを二つ頂きまーす。玉コロダブル頂きまーす」

「はおおお」

「ちなみにみんな、この技、金カップは当てやすいし衝撃を逃がさずタマタマに伝えられる便利技だから覚えておいてね」

「ぎゃはは！　金カップって！」

「キ〇タマをカップで包むから金カップだよ。あ、ついでにこのまま玉握り」

「はふっ！」

「こうやってぎゅっと股間を掴んで、男の急所を……握り潰す！」

「あおおおおおおおおお！」

　ぎゅうううううう、と女児の小ぶりな手が男性器を容赦なく握り潰す。内股で爪先立ちの隼人。

　唾を飛ばして笑い転げる女児たち。

「ぎゃはははは！　なにその恰好！」

「顔見てよ顔！　なさけねー！　なにあの表情！」

　ムンクの叫びのごとき絶望の表情だが、同じ目に絶対合わない女の子様たちはまるで共感しない。

「クラス一のイキり男子も所詮男子だからねー、女の子にキ〇タマ握り潰されりゃこんなもんでしょ」

「ひ、卑怯、卑怯……こんなのおおおお」

「あら、卑怯？　それは心外ね……それじゃ、手をこっちに」

　腕を引っ張っている女児二人のうち、右手を押さえる側に声をかける。

　隼人の手を引っ張り、スカートの下に入れさせる。

　そして、玉握りを緩める。

「はい、隼人」

「な、なんだよ！？　ほぐうううううう！」

　ぎゅうううううう、と再び女の子様の地獄の金握り潰し。

　目を吊り上げる高見。

「オラオラおチン〇ン様よお！　なんですかでしょうが？！　立場理解せず偉そうな口聞いてたら、キ〇タマ潰すぞ、キ〇タマ潰すぞ、キ〇タマ潰すぞおおお！？」

「なんですかなんですかなんですかあああああ！」

「あはは、そうそう。で、話の続きだけどさ」

　手を緩める女児。文字通り生殺与奪を握られていることを実感しつつ、ぐったりする隼人。

「な、なんだ……なんですか？」

「卑怯とか言われるのはあれなんで、同じ条件で勝負してやんよ」

「といいますと？」

「私の手は、あんたの股間に。そしてあんたの手は……私の股間に」

「え、え、ちょ」

　言われて気づく。女児のパンツに自分の掌が密着していることに。

「みんな見て！　これから私たち、男と女のどっちが強いか、正々堂々同じ条件で勝負して決めるかから！」

「おー！」

「確かにこれは公平！」

「同じ態勢だもんね！」

「ちょ、ま……頭おかしいのか馬鹿マ〇コども！　お前らキ〇タマもない出来損ないだろ！？　こっちは握るモノはねえ、そっちは手の中に絶対急所……どこが公平……あああああ！」

「はい勝負スタート！」

「お互い股間握り！」

「女の子相手に、公平な条件で戦えないとかそれでも男？　金の玉ついてんの？」

「今の所付いてるよ！　お股の間にタップタプ、肉の袋がたーぷたぷ、中身は男の弱点の、金ちゃんボールがブーラブラ」

「あおおおおお！」

　ぎゅうううう、と隼人の股間で握り締められる高見の手。

「んー？」

　ぎゅうううう、と高見の股間で握り締められる隼人の手。

「やめ……放せえええええ！」

「きゃははは！　やーだよ！」

　全く同じことをやりあっているのに、片方だけが大打撃、片方はノーダメージという、世にも奇妙な物語。

「きゃはは！　そんなに痛いの？」

　のたうつ隼人の顔を覗き込む女児たち。

「はぐうううう」

　――潰れる、今にも玉がっ……玉握るを圧迫される感覚以外何も感じられなくなる。苦しい。でも、それ以上に、怖い。玉が、潰れる、今にもって思うと怖くてたまらねえ！

　痛みより睾丸破裂の恐怖。しかしそんなことを女児に言ってもわかるわけがないし、言う余裕もない。

　と、玉握りが緩む。手を肩の高さでプルプルと振る。

「ふう……疲れたー」

「そ、それじゃもう……はぐっ！」

「キーンと！」

　放した手をカップにして股間に叩き込む。

「あぐっ、あああ！」

　目を剥く隼人。手を下げ、再び打ち上げる高見。連続で上下させる。

「キンキンキンキンキーン！」

「あががあああ！」

「ぎゃはは！　いい反応！」

「そんなに力入ってないでしょ！」

「いけいけー、そのままキ〇タマ削りつぶせー！」

「ぐむううう」

　――お、俺、間違ってた……俺がうまくやらないから、男子と女子が揉めてると思ってたけど……揉めてる理由は女子が悪いからだ。この玉無しクソマ〇コどもが……

顔をゆがめる隼人。と、その表情の変化に首をかしげる幼馴染。

「あれ？　隼人なんか考えてる？」

「な、何のことだよっ」

「その顔は、なんか女性蔑視発言的な思考してる顔じゃない？」

「な、な、そんなわけないだろ！　玉無しクソマ〇コぐらいで蔑視とか……はぐあっ！」

「なんてこと言うのよこの腐れおキンキンがよお」

「こりゃ気絶するまで分からせるしかないわね、女の怖さを、このおキ〇タマに！」

「やめ……あああああ！」

群がる女児、逃げようとする隼人を後ろの女児が羽交い絞め。

次々と膝金蹴りをかましてくる女児たち。太ももを閉じても前からの膝蹴りの衝撃は肉を押し潰して抜けてくる。

「あぐあああああ！」

「ほーれほれ！」

「キ〇タマ痛いか？　痛いかー？」

「あお、ちょまっ、あぐっ！」

内股で腰を引くが女児らは平気で膝金を続ける。

一際強力な一撃を受け、隼人の膝が崩れる。

羽交い絞めの女児が手を離すと、その場に転がる。

「はんぐうううう、あ、まっ」

倒れた隼人の足を、女児らが掴んで拡げにくる。度重なる急所攻撃で立っていられないほどである、足を閉じる力などない。なすすべなく拡げられる。腕も抑え込まれ、完全に無防備な股間を女児らに見下ろされる。

「も、もうやめっ、玉だけは許してっ！　お前ら玉無しの出来損ないと違って男の股間は繊細なんだっ！　あっ」

ギュム、と太ももの間の膨らみを高見の上履きが踏みつける。

「あ、ひ、やめ……」

「はーい皆！　最後まで出来損ないとか、おチン〇ン主義発言をやめなかった男の子様に、とどめいくよー！　男としての最後だから、せめていい物見せてあげて」

「あは、そうだね」

「じゃ、見せてやるか」

スカートの女児らが隼人の顔というか、頭の周りに集まる。

そして一斉にそれをめくる。

艶子も胴体を跨いでパンツを見せる。

視界を埋める女児パンツ。それとつながるムニムニした太もも。

「な、なんだお前ら……ああっ！」

「はい、金踏み潰し！」

軽く体重をかけ、探るようにグリグリと足首を左右に捻じるように水平に動かす高見。

「やめ、あおおおおおおおおお！」

「はいシェイクシェイク！」

　足の前側に玉を置き、指を巧みに動かして小刻みに振動させる。

「ぎゃはは！　そのままコーガンミンチだ！」

「あんなのでダメージとか！」

「玉ついてなくてよかったわ！」

「私らならそんなの食らっても全然平気だよ？　ここ、うらやましい？」

　のたうち、絶叫する隼人を見下ろして嘲笑し続ける女児たち。

「あぐあああ！」

　――やべえ、やべえよ。クラスの争いは、俺ら男子のほうが有利っぽかったけど、あんなの……こいつらがキ〇タマ狙うのをちょっと遠慮してくれてたからだ……女が、自分にはない男の急所を集中的に狙ってきたら、俺たちなんて……

　見上げる。

　女児たちのまったいらな股間を。

　――なす術ねえ。男同士なら同じように反撃できるけど……こいつら、キ〇タマないから……

　次々交代し、電気あんましていく女児たち。みな、全然本気で踏み潰そうなどとはしていない。むしろ相当加減している、優しい女児たちだ。

　しかしその加減は、付いていない者のそれだ。

　隼人の顔の横で、高見がしゃがむ。

「どう？　女の子の怖さ思い知った？」

　いいつつ、にじり寄ってスカートを顔に賭ける。そしてその中に手を入れ、クイっとパンツを横にずらす。

「あっ」

　ぴっちり閉じた肉の縦筋。

「うふ、内臓がポロリしてる男の子のそこと違って、女のお股はすっきりまとまってるでしょ？　というより、内臓が出てて、そこが弱点ってほうが変なんだよ」

「へ、変って……」

「よーく見て、どっちが上か思い知ってね」

「こ、このあああああああ！」

　睾丸を振動させる女児たちの足。彼女らが飽きるまで、ただやられているしかない隼人。

体験版終わり

この後幼なじみ姉妹に風呂で玉責めされたり、

女子と全裸相撲で玉握りされたりと隼人の玉責め受難はまだまだ始まったばかりです。

続きは製品版でお楽しみください